

鍼灸 (東洋医学) の境界領域へ向けて

—人間の能力と東洋医学の臨床—

内田 匠 治* (九州看護福祉大学)

Jumping to a frontier of acupuncture and moxibustion (Oriental medicine) —Relation between the human ability and clinical Oriental medicine—

Takuji UCHIDA (Kyushu University of Nursing and Social Welfare)

はじめに

$7^3+7^3+11^3=2017$ となる今年 (素数の三乗の和となるのは19世紀から22世紀の400年間で今年だけだが、この数字の組み合わせは数秘術的には面白い組み合わせである¹⁾) は、新時代の幕開けとなる年なのかもしれない。前回の人体科学会第26回学術大会 (京都大会) では、そのような息吹を感じさせる発表を眼前で体験した。それらの発表の1つ鹿児島県の山野医院の山野隆氏による「ネクストサイエンス」の提唱は筆者も実践している始原東洋医学の技術とも密接に関係しながら、科学の在り方自体を問う大きな枠組みの提示であった。本稿ではそれらの新しい動きを紹介しながら、従来の鍼灸・東洋医学の枠組みから飛び出した、新たな臨床領域への発展の可能性を論じたい。

1. 鍼灸・東洋医学の臨床で起こっていること

鍼灸・東洋医学の臨床で起こっていると考えられることとして『医療原論いのち・自然治癒力』では、以下の3段階のかかわりを説明している²⁾。

- 1) 技術 (CURE) として病に対して治療という介入をするレベル
- 2) 仁術 (CARE) として治療者の人柄を含めて、患者の人柄に作用するレベル
- 3) わざ (CORE) として治療者のいのちを含めた全体性が患者のいのちをふくめた全体性に作用するレベル

1) は東洋医学では、陰陽論や五行論などの理論により説明できる治療効果のレベルである。2)、3) については、気のような言葉で説明され、従来あまり理論として説明されてこなかった部分といえる。さらに本稿ではこれに、4) 干渉 (COHERENCE) として治療者という小宇宙が大宇宙を巻き込んで介入することで、大宇宙を介して患者という小宇宙に作用するレベルを加えたものを東洋医学の臨床で起こっていることのモデルとして提唱したい (図1)。

2. 東洋医学臨床における大宇宙 (世界) との関係

図1における4) 干渉 (COHERENCE) とは、臨床における行為というものが、患者の病を治すということだけではなく、治療者の介入によって、世界に影響を及ぼしていることを指す。たとえ話で言えば、腰痛の患者が来院されて治

*〒865-0062 熊本県玉名市富尾888
九州看護福祉大学
Tel. 0968-75-1800
e-mail: uchida-t@kyushu-ns.ac.jp

人間の治療という行為

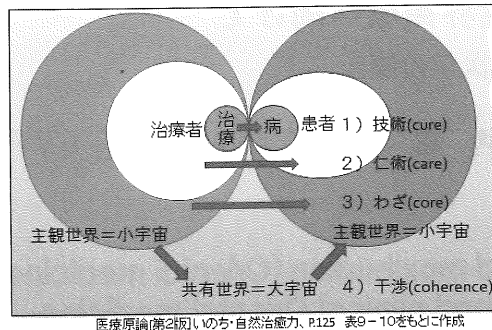


図1

療をして腰痛が解消した。腰痛が解消したので、患者さんは予定していたゴルフに行き、帰り道に交通事故に遭ってしまった。この場合、治療をしなければ、交通事故には遭わなかったとも考えられる。治療という行為が、大宇宙（共有世界）に作用することで別の事象を引き起こす可能性があるということである。

治療する側の理想としては、病というマイナスに治療というプラスを与えて相殺した結果、さらなる幸せ（プラス）をもたらすようになってもらいたい。このような問題について、東洋医学ではどのように対処してきたのかを東洋思想（東洋学）全体から俯瞰すると、「東洋五術」のような東洋医学とその周辺領域の学問との関係性が一つの答えとして見えてくる。東洋五術とは命、卜、相、医、山（仙）（めい、ほく、そう、い、せん）の5つの術を指す³⁾。諸説あるが、気の学問という観点で簡単に説明すると、

命：暦学をもとに生年月日、生まれた時間などから、生まれてきた理由（天命、宿命）などを分析して、現在の座標を理解する学問
 卜：易占など答えがYes/Noでわかる占いによって、現状と未来などを分析する学問

相：観相学（手相、人相、家相など）。形態からその背後の気の状態（運氣など）を分析する学問

医：東洋医学（湯液、鍼灸、推拿など）

山：仙術（不老不死、不老長生のための呼吸法、ボディワーク、瞑想法など現代でいう気功

の類)

と定義できる。命卜相はいわゆる占いとされるものであるが、これらの5つの術（学問）は相互に関連して発展してきた。例えば、閻明広（えん・めいこう）の『子午流注鍼経』（1153）などは、時間による配穴理論であり、命術と鍼灸の融合と言える⁴⁾。また、東洋医学の診断技術である望診は観相学との関連が深い⁵⁾。これら東洋五術は共通する「気の学問」という特徴から、相互に影響しながら発展してきたと考えられる⁶⁾。この東洋五術の中に、いわゆる占いの的なものが含まれるところから、東洋医学では前述の腰痛の例のように、治療という行為が大宇宙を巻き込んで引き起こす不都合な事象についても意識を向けていると思われる。このような所謂、運とよばれるような大宇宙（世界）とのかかわりまでが鍼灸・東洋医学の臨床で起こっていることであり、本稿ではそこまでを対象とした治療を鍼灸（東洋医学）の境界領域^{註1)}に及ぶ治療と定義する。

さらにこの東洋五術の構造を見ると、最後の山（仙術）が他の技術と比べ異彩を放っていることがわかる。極論を言えば、仙術が完成すれば他の術は必要ないし、別の言い方をすれば、仙術の完成を早めるために他の術が存在しているようである。大きなエネルギーで出力された情報の前には小さなエネルギーで出力された情報はノイズのようになってしまうように、不老不死という超人的な状態（大きなエネルギー）の前には、占いなどの情報分析や病などはノイズのようなものになってしまう。ここに中国の古代の人々が学術（学問と修練）によって到達できると考えた人間のいのちのポテンシャルの無限性をみることができると思う。

3. 従来の東洋医学理論と臨床における効果

東洋医学では、陰陽論や五行論をベースに理論が組み立てられる。それに基づいて臨床治療を行うと効果があるように感じられるが、特に鍼灸などでは同じ場所に同じような治療をして

も施術者によって効果が大きく異なることがある。この違いについて、臨床家の間では漠然と技術の差と考えられている。技術には具体的な指先の動きだけではなく、気のような非物質的な言語化しにくい部分が含まれる。図1でいえば、東洋医学理論による部分は1) 技術 (CURE) に相当し、それ以外の気のような部分は2) 仁術 (CARE)、3) わざ (CORE) に相当する。この三つによる差を技術の差として考えると考えられる。ここで問題となるのは、前述の仙術と他の術との関係に当てはめれば、治療者の気のエネルギーが大きくなってしまえば、仙術が他の術を凌駕してしまうように東洋医学的理論の影響は相対的に少なくなることである。これは、仮にこの宇宙に東洋医学的な真理があるとして、それとは少しかけ離れた理論に基づいて治療をしたとしても、治療者の気が大きければ求める効果が出るということである。そのような理論と効果の関係モデルを想定すると、鍼灸師がある流派に所属して、その流派上の理論と技術を学び、練習して徐々に治療効果が高まるという現象があった時に、そのことが直接、その流派の理論的な正しさの根拠にはならなくなる。それは、この現象の背後に練習を繰り返すことによって治療者の気が大きくなっていくということが可能性として含まれているからである。決まった形に従って練習を繰り返すということは、動きの繊細さを生み、気功などの型稽古に共通する。つまり、気功の練習によって気の能力が高まるような現象が発生する可能性がある。また、流派に傾倒して効果を疑わないという心理状態は気功による意識エネルギー^{注2)}の開発という側面と共通する。これは瞑想や呼吸法などによって精神を統一し、迷いが無いことによるパフォーマンスの向上である。似たようなことは臨床に携わっていると経験するような、迷いがあつたりすると効果は出にくいような現象に通じる。また、教育現場で学生の性格と治療効果を観察すると、自信があり自己肯定感が強い学生のほうが治療効果は高いように思われる。迷いが無い、自己肯定感が高いということを気感覚の言葉で置き換え

れば、勢いがある治療者、元気がある治療者ということになる。

このような気の現象は人間の意識が物理的世界にどのような作用を与えるかということにも関係する。現在地球意識プロジェクトなど、集団の意識が物理世界に影響を与える可能性が示されてきている⁷⁾。もし、人間の意識が乱数発生に影響を与えるならば、統計的な処理に基づくエビデンスは実験者の意識の影響を受けている可能性がある。先に結論ありきで実験を行うことが問題とされ、研究者の心の公平さが求められる時代が来たとき、それは東洋医学の科学的研究が境界領域に到達したということになるだろう。

臨床では、このような術者の意識エネルギー(気の力)と東洋医学の理論に基づく効果が相互作用していると考えられる。気の力の部分には、想いの力、祈りの力などが含まれる。これらは伝統的な東洋医学の成立の中で巫術として排除されてきた要素である。そのような術者の意識に関係する文字にしにくい気の力の要素もまた、鍼灸(東洋医学)の境界領域と定義したい。

4. 鍼灸(東洋医学)の二つの境界領域を意図的に使う可能性について

以上のように東洋医学の境界領域には、臨床的介入によって影響を受ける外側の世界と論理的に説明できる東洋医学理論の外側にある意識エネルギーの2つが存在する。この世界の要素と我の要素はお互いに干渉しあい、我の要素の出力が大きければ、東洋五術の仙術のように世界への影響力が増すと考えられる。時代を経るに従い、人類の意識は自由になってきた(あるいは自由になっていく)と思われる。心理的ブロックが外れることにより我の要素の出力は大きくなっていくだろう。このことにより、鍼灸(東洋医学)の臨床は境界領域に広がっていくと思われる。また、自由になった意識からは、必然的に意図的にこのような領域を使っていくという発想が生まれてくると考えられる。こころや、魂、いのちなどを含む境界領域を治療として使うことによって、治療という行為が単に

身体としての病を治すということではなく、
ていくのである。

そして、そのために必要なことは、意識を広
げることである。意識を広げる方法は1つでは
ないが、ここでは「当事者としての治療」とい
う考え方を提示したい(図2)。

2つの「世界(他者)と我」

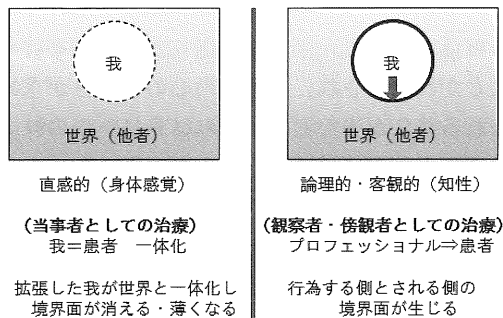


図2

図2における「観察者・傍観者としての治療」
とは、科学的な思考としての観察者としての視
点を持ち、プロとして効果を追求した治療行為
を行うことを意味する。この場合、治療者とし
ての我は世界に浸潤しない。一方、「当事者とし
ての治療」では、患者の抱える問題は、理屈
ではなく身体感覚として拡張した我の問題でも
あり、当事者として共に考えながら解決のため
の努力をする。治療者と患者の間には強い共感
性が生じ、それにより、仁術(CARE)やわざ
(CORE)が強く作用する^{注3)}。身体的治療効果
とは別に、患者が救われる可能性が生じる。人
間をいのちの存在として考えたときに、この二
つは車の両輪のようにどちらも必要であり、東
洋思想における陰陽合一のように^{注4)}同時に行
うことによって、単純な量的な作用ではなく、
質的な変化をもたらすと考えられる。

質的な変化の一つの例として、プロフェッ
ショナルとしての物理的な効果を出しながら、
当事者としてのいのちの存在である患者とともに
治り、成長することは、「病気は治らないけど
心は救われた」という善き事の中に潜むルサン
チマンの罟を容易に壊すことができるというこ

とがある。物理的に病気が治ってしまえば、「病
気は治らないけど…」というような言い訳がま
しい表現をしなくてもよいわけであり、物質要
素があつてこそ、心の救いも生きてくる。物質
的な裏付けなく、ルサンチマンを壊す事は可能
だとは思いますが、多大なる精神的労力を必要とす
るだろう。コロンブスの卵の逸話^{注5)}のような、
困難なことを簡単に乗り越えるということは、
質的变化(論理の枠組み自体の跳躍とその美し
さ)がある。

もう一つの質的变化としては、このように「当
事者としての治療」として、我を拡張しながら、
「観察者・傍観者としての治療」で結果を出す
ことで、「患者を治すこと(患者が成長すること)
」、即ち我を治すこと(我が成長すること)
ということについて素直にそう思えるようになる。
この状態において、世界に拡張した我が成
長することは世界が成長することと同じという
意識が生まれると考えられる。

5. 「世界=我」の身体感覚的理解として のネクストサイエンス

「世界=我」という概念は、密教だけでなく、
世界中の伝統的な神秘主義に見られる考え方
であるが、理論的な知性による理解を超えてお
り、身体知によって理解する必要がある。伝統
的な神秘主義にはそのための修行法も伝わっ
ているが、それらは一般人には実践が難しいと考
えられてきた。しかし、昨年の人体科学会(京
都大会)において、参加者との体験型発表とし
て山野隆氏が公開した方法は、非常に簡便であ
り、「世界=我」を身体知として理解させる可
能性を秘めていた。つまり、身体の治療を通し
て、ある一人の治療者がその部屋にいる他の人間
にも伝わるという現象が起こりやすい治療方法
であった。このことを繰り返して体験すること
により、自己と他者という概念が思考の産物であ
り、宇宙の真の姿ではないことを身体感覚とし
て理解させることができる。日常の治療の中で
自己と他者はつながり、自己と大宇宙がつなが
るといふ体験(このことにより、意識は飛躍的
に広がっていく)が達成しうるといふ可能性が

示されたのである。

従来のサイエンスに身体知を導入し、ネクストサイエンス^{註6)}とするためには、サイエンスする主体者が身体知することができる身体感覚を備える必要があると思われる。しかし、伝統的な身体感覚の開発方法は一般的には難しいと思われ、普及しているとは言えない。一般人にも身近な治療を受けるという体験によって、難しいという固定概念を容易に乗り越えさせるという手法は画期的であり、今後の発展性が非常に期待できる動きである。

注

- 1) 本稿で使う「境界領域」とは、境界面だけでなく、その周囲のどちらとも判別しがたい領域を指す。境界そのものを言語で定義しにくいいため、境界面とその内外の領域を包み込む概念として用いている。
- 2) 本稿では意識がエネルギーと情報を持ち、物理世界に影響を与えると仮定した場合の意識を「意識エネルギー」と呼ぶこととする。
- 3) 鍼灸臨床では俗に「患者の邪気を受ける」というような患者の不快症状を術者が感じる身体現象があるが、それはこの「当事者としての治療」の1つの側面である。患者の発信するネガティブティと同調したときに、術者の発信するエネルギーが下回ったためと考えられる。本稿のモデルから敷衍すれば、意識を広げて術者のエネルギーを大きくすることによって防ぐことができると考えられる。
- 4) 陰陽合一すると、男女の陰陽が会って、子供が生まれるように新しい「いのち」が生まれる。プラスとマイナスが会って、相殺

するだけの現象ではなく、別の次元の創造性がある現象である。

- 5) この逸話の中でコロンブスは卵をつぶして立てるということで、卵を割らないで立てなければいけないという思考の囚われを壊してみせた。実際は、努力すれば卵は割らずとも立つらしい（中谷宇吉郎、中谷宇吉郎随筆集、岩波書店、収録「立春の卵」より）。ルサンチマンを精神レベルで克服するのは不可能ではないと思うが、注意深く重心を調整して卵を立てることに似て、それなりの労力がある。
- 6) 従来のサイエンスに身体知を導入するというのは、ネクストサイエンスが包括する概念の中の1つである。

引用文献・参考文献

- 1) 伊泉龍一、齋木サヤカ：数秘術完全マスターガイド ナンバーで運命を切り拓く モダン・ヌメロロジー 14のレッスン、駒草出版、2009
- 2) 渡邊勝之：医療原論 [第2版] いのち・自然治癒力、医歯薬出版社、p.125、2017
- 3) 張耀文、佐藤六龍：中国正統「五術占い全書」-命・ト・相・医・山のすべて-、香草社、2008
- 4) 肖進順、肖素平：子午流注針法入門（修訂版）、人民軍医出版社、2012
- 5) 西沢道允：医道の望診入門 人相の極意と医法、一皇漢医道研究所、1956
- 6) 魏稼（浅川要訳）：中国鍼灸各家学説、東洋学術出版社、2003
- 7) The Global Consciousness Project
<http://noosphere.princeton.edu/>